「教育臨床総合研究紀要４　2005研究」

地域教育の課題と島根大学の役割

―― 山陰地域における教育の現状・課題と島根大学教育学部の役割 ――

Problem of area training and role of Shimane university
―Current state, problem of education in The San'in region,
and role of Department of Education at Shimane University―

山　下　政　俊*　　杉　本　正　春**
Masatoshi YAMASHITA　Masaharu SUGIMOTO

要　　旨

本研究は、平成16年度島根大学公開講座「地域の未来を考える」において、「地域教育の課題と大学の役割」というテーマで行った講演に際して、参考資料として鳥取県・島根県の小中高校の校長先生方に実施したアンケート結果を集約し、考察を加えたものである。

[キーワード]　仲間づくり、地域教育、教員養成、再教育

Ⅰ．はじめに

今日、わが国では、様々な教育改革とその努力にもかかわらず、学級崩壊、不登校・引きこもり、いじめ・暴力・殺人、基礎学力・学習意欲・体力・気力の低下、学びからの逃走、学ぶことの拒否、学校崩壊・教育方針の溶解など、子どもと学校をめぐる現況の下で、学校の存在意義が厳しく問われている状況がある。このような状況を山陰両県の学校現場ではどのように捉え、どのように対応していこうとしているのであろうか。平成16年度島根大学公開講座の開催に際して、その参考資料として両県の校長先生方70名に記述形式のアンケート調査を依頼したところ、64名（約90%）からの貴重な回答を得た。この回答を集約および検討することにより、山陰両県における教育の現状と課題について明らかにしていく。

Ⅱ．アンケート調査の集計結果

今回の調査は、昨年の８月下旬から９月中旬にかけて郵送によって依頼と回収を行った。全部で６つの設問について、いずれも記述形式によって回答をお願いした。６問目は自由欄であっ

* 島根大学教育学部
** 島根大学大学院教育学研究科

たが、内容が多岐に渡っていたり、他の設問の回答と重複していたりしていたため集約ができなかった。そのため今回は集計の対象に加えなかった。また、回答の記述内容を分類整理した上で集計したことにより、回答者数と回答数には違いがある。なお、回答例の頭にある数字は、回答用紙に便宜的に記した受け取り順の連番号である。

１．学校教育おいて最も大切なこととして取り組んでいることについて

回答の中で多数を占めたのは、児童生徒が理解し合い、助け合い、励まし合う仲間づくりと、教育のプロとしての自覚を持ち、全員が一体となって指導にのぞむ教師集団のあり方であった。仲間づくりでは、

（４）「こどもたちの自治集団が成立し、こどもたち一人一人が学級への所属意識を持ち、主体的に行動することに取り組んでいる。」(24)「信頼される学校づくりのために、学校生活の基盤となる学級経営を重視している。」(29)「自分を伸ばす努力のできる子どもの集団づくり。」(42)「教師は子ども達と人間担任としての関係を築いて、喜怒哀楽をもった関わりの中での指導ができ、どの子も自分の存在感を感じ取る学級経営ができること。」(50)「一人一人の児童が自分の力を出しきり、活躍できる場を設け、自信をもって行動できるように取り組んでいる。友だち関係のトラブルをうまく解決できるよう見守り、助言を行っている。」(52)「一人一人をまず受け止めること、それから子ども相互の関わりをスムーズにすること。」(53)「やさしく厳しい仲間づくり。お互いのよさを認め合える仲間づくり。自分の思いをうまく伝えあえる仲間づくり。」(55)「友だちの心の痛みの分かる子に育てる。」

というような回答があった。いずれも、子ども同士が積極的に関わりあうことのできる学級経営が学校教育の基盤であるという認識を持っていることが分かる。教師集団のあり方については、

（５）「『これまで通り』の枠組みの中で教育実践をしている教職員の意識改革と実践力向上を図ること。」(15)「担任集団の縦と横を繋ぐスタッフが校長を中心とした職員集団であり、これが学校経営の要と思っています。」(16)「『教師が変われば、授業が変わる』を合い言葉に、子どもが伸び、子どもが変わる学校を目指している。」(20)「学校教育の中で最も大切な、『学習指導』や『授業』そのものに向けられる教師や子どもの意識、教師集団の研き合いが確実に弱くなっていることを肌で感じている。教室を開き、授業を開く。お互いの授業を見合い、研きあう。教えることに喜びと生き甲斐を感じる教師を育てることが管理職の仕事であると思って、声を掛け、働きかけを始めている。」(29)「子どもは『指導者の後ろ姿を見て育つ』を常に念頭に置いています。」(34)「不断の教材研究に力をそそぐこと。骨太な実践と確かな手応えをもつこと。子どもの『生き方』を確かにする指導ができること。子どもを的確にとらえ、問題点と課題を明確に出来ること。」(38)「学校や校長や教職員が、何でもいいから、一番大切だと思うこと《自分の得意なことなども含めて》を決めて、模索しながら粘り強くやっていくほかに学校現場を活性化する道はないような気がしています。」(42)「教師は子ども達と人間担任としての関係を築いて、喜怒哀楽をもった関わりの中での指導や、どの子も自分の存在感を感じ取る学級経営ができること。」

以上のように学級経営における担任の指導性あるいは意欲の如何が、そのまま学校経営全体

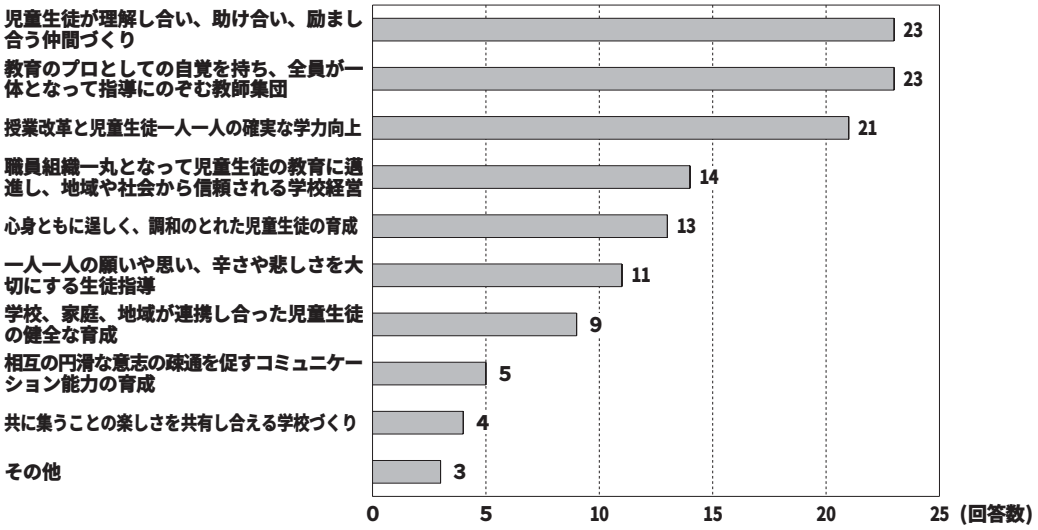
に大きな影響を及ぼすということを述べている。

次に回答数が多かったのは学力保障についてであった。

(27)「『学校経営は、まず授業改善から』という信念のもと、授業指導に力を入れている。『教師は授業で勝負する。』とよく言われるが、最近の先生方の多くは、自分の追究すべき授業スタイルを持っていないように思うし、理想とする授業を思い描いていたとしても、それを追究しようとしない。授業の良し悪しによって、子どもたちの学校生活への適応度は著しく違ってくるし、その後の成長過程にも大きく影響する。」

『教える』という教師本来の責務をきちんと果たし、児童生徒に確かな学力をつけさせることを、学校教育の根幹と捉えていることが分かる。

設問１　学校教育においても最も大切なこととして取り組んでいることは何か



２．目の前の子どもについて現実に感じ取っていることについて

回答の中で多数を占めたのは、耐える力と学力の低下についてである。

(16)「我慢する力が弱く、困難な場面に出合うと投げ出したり、拒否したりすることが多いと思う。」(24)「耐える力の低下が、児童の生活のかなりの部分《意欲・不登校など・・》に影響しているように思われる。」(27)「忍耐力が乏しく、様々な困難に立ち向かうことができなかったり、少々の負荷にも耐えきれなかったりするなど、現実から逃避する傾向が強い。」(31)「偏食と同じように、好きなことはするが、嫌いなことはしないという生徒が増えている《例えば、体育の授業は出席せず保健室に行く。数学は好きでよく勉強するが、英語は嫌いなため全く勉強しない》。」(32)「苦しいことから逃避し、運動面、学習面とも鍛えられることをいやがる子どもが多いのが気にかかる。さらに、『耐性』『我慢する力』が弱いため、精神的なもろさを感じる《不登校児童の出現につながっている》」(49)「小さい頃から失敗の経験を繰り返し、そして、周りの人からの励ましなどでまた意欲をもって行動していくことが、自尊感情や耐性を高めていくことにつながると思いますが、その失敗をさせないように導いてしまっ

ている大人が増えているのでは、と感じています。」

以上のように、我慢する力、耐える力の低下を指摘する回答が目立った。小さな失敗や挫折すらしないまま（させてもらえないまま）成長している子どもの姿がある。そして、そのように仕向けているのは大人なのである。

学力低下については、最近の国際的な調査結果でも明らかになったように差し迫った重大な問題となっている。現場ではこれについて次のように捉えている。

(14)「学力や学習意欲に乏しい児童生徒が、以前にも増して反社会的な行為や不登校といった具体的な姿《行動》として表面化してきているように思います。」(31)「全体的な学力の低下と学習意欲の二極化傾向が見られる《特に全体では、言語に関する力の低下を感じる》。」(36)「学力がほとんど付いていないといっていい生徒が、少なくとも各学年に１割はいる。自分から学習する意欲は全般的に乏しい。やらされている気持ちが強い。」(37)「家庭学習の時間も塾を除いて一時間以内がかなり多い。背景に成熟社会となり、勉強しなくても何とか食べていける社会になったことが強いように思われます。ハングリー精神の欠如、勉強する目的が見いだせない生徒が増えてきたように思います。」(38)「学習意欲の低下等が、子どもの側だけの問題ではないということも考えていく必要があると思います。家庭・地域の問題もありますが、教職員の子どもへの関わり方も問題にしていかないと、問題の解決はなされないような気がします。」(40)「学習意欲《自分がなぜ学んでいるのか》の喪失。学ぶ目的が見いだせない子ども達。」(45)「ゆとり教育の弊害からか、基礎基本ができてなく、現在の学習内容が全く理解できなくなっているようにも感じています。」(54)「学力について算数の文章問題がほとんどの子どもにおいて苦手であることが気になります。」(60)「自学力が弱いと思う。以前はもっと自分で努力し、勉強して力をつけていた。特に、毎日、地道に学習を積んでいくようなことが少ない。」(61)「学力・学習意欲については、今や、高校入試段階の多くの新入生は、『だれも静かに机に着いているのが不思議だ』という反応を示しています。中高連絡会での中学校管理職の話や入学してきた生徒の話から推測しますと、一般的な傾向として、真面目を嫌う風潮の中で、授業に落ち着いて取り組む事が出来ないこと、家庭学習が習慣化されていないことをあげることが出来ます。その結果として、学力低下現象がみられると思います。勉強は塾でという風潮さえあるように思います。」

今回の調査は、最近の国際的な学力調査結果が明らかにされる前に実施したものであるが、すでに現場では、学力の二極化や言語能力低下の問題が実際に表出している現状を見て取ることができる。また、ゆとり教育の実施による指導内容や時間数の削減の弊害として、基礎基本の定着が十分になされていないことを指摘する意見もある。学力と学習意欲の向上に向けての早急な対策が必要である。

次に回答数が多かったのは、社会的な生活経験や体験、公衆道徳観の不足であった。

(29)「自立し、社会へ出て行ける人間になるようにという観点を持って、必要なことを大人《親》から教えられて育っていない子どもが多くなった。」

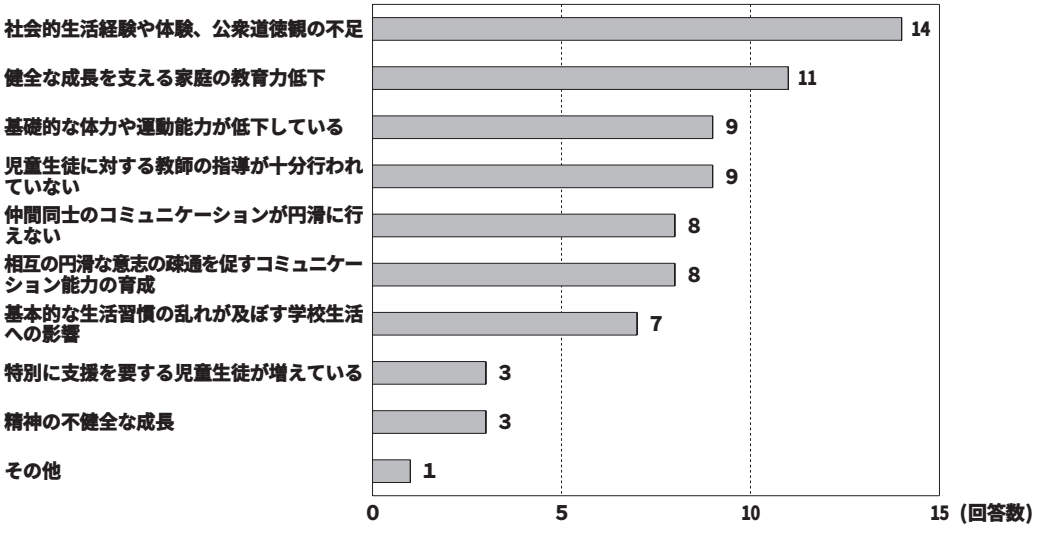
以上の意見に代表されるように、本来社会性を培う一番の場である家庭や地域において、それを支える大人の教育力の放棄、あるいは低下が学校現場で反映されている実態を感じ取ることができる。特に、子どもの生活基盤である家庭の教育力の低下を指摘する意見が多数見られ

た。

（１）「複雑な社会の変化、離婚などの家庭問題、価値観の多様化、特に若い保護者の自己中心的な価値観などが反映しているのだと思うが、子どもそのものより、むしろ、その背後の保護者の対応に苦慮する。親子一緒に対応し、教育する形をとらざるをえない難しさを感じている。」（４）「保護者の子どもの幸せを願う思いは昔と変わらないと思います。しかし、保護者の養育態度は違ってきていると感じます。例えば、担任の至らぬ点があっても我が子には言わないものでしたが、最近は、『だからお前がしっかりするんだ』というようなことを我が子に話すという保護者が多くなってきました。」(14)「虐待も件数としては多くありませんが、身近に存在するようになりました。どこから虐待と捉えるかは難しい所ですが、親としての愛情が欠けていると感じる事例をここ数年で何件か経験しました。」(29)「自立し、社会へ出て行ける人間になるようにという観点を持って、親が必要と思うことを教えて育てられない子どもが多くなった。」(39)「子どもたちは大人社会の生活背景をしっかり背負って登校してきている。」(47)「親の耐性が乏しく親自身が楽しい生活の仕方を優先したり、子どもの教育は他人まかせにしたりするタイプが増えている。母子家庭、父子家庭も増加。親の精神的な後押しがないため、根無し草的な子どもが意欲減退などにつながるのではないかと思われる。」(61)「夫婦仲の悪さ、離婚、子どもへの過干渉と無関心、大学進学への過剰な期待など、家庭の中に子どもの情緒を不安にさせる問題が多いように思います。」

かつて、『親はなくても子は育つ』という言葉がもてはやされた時代があった。社会全体がしっかりとした教育力を持っていた時代はこの通りだったかもしれないが、今日のような社会情勢では、各家庭においてしっかりとした教育が行われることが必要だといわざるを得ない。しかし、その一方で親の独りよがりな価値観が子どもの成長に及ぼす影響を、学校現場が困惑混じりに受け止めている現状もある。

設問２　目の前の子どもについて感じていることは何か



３－１．家庭や地域における子どもの育ちの現状について

この設問に対しては、家庭や地域の高い教育力によって学校教育が支えられている現状を伝える回答があった。山陰地方の特性を伺わせるものである。

（２）「本校は家庭・地域の協力が非常にしっかりしている。青年や大人が子どもを育ててくれている。又、村役場も理解があり協力的である。」（８）「担任と保護者が子どもの発達課題などについて日頃から話し合い、情報を共有するよう務めています。夏休み前には地域の自治会、民生委員などにも地域懇談会に出席していただき、子どもたちの現状について話し合っています。」(12) 公民館を中心とした少年団活動があり、奉仕の気持ちや基本的な生活マナー、環境を守る気持ちなど、すばらしい社会教育を受けている。」(16)「公民館を中心とした社会教育活動や子どもが参加する地域行事も活発で、地域全体で子どもたちを育てていこうとする風土がある。それが、児童の健全育成に大きな役割を果たしている。」(19)「地域の子どもが参加して、大人とともに、『里づくり運動』が推進されている。そこでは、『明るい子どもの育成』『あいさつする子どもの育成』などがテーマとなっている。基本的しつけをしっかりと身につけさせようとする努力がある。」(44)「家庭教育の中でしっかり子どもを育てると同時に、地域の子どもとして子ども達が見守られ、育てられることこそ、よい育ちにつながると考えます。そういう面では、本校は比較的、望む方向で子ども達が育てられると思っているところです。」(55)「ほとんどの児童が三世代以上の大家族で生活している、地域の方も児童の名前や顔を知っていて声をかけたり、あいさつしたりして温かい雰囲気の中で生活している。」(62)「読み語りボランティア、ホッケー指導ボランティア、授業支援ボランティアをはじめ、地域の皆さんや老人クラブ・婦人会などの団体が積極的な支援をしてくれる。《PTA以外に老人クラブ、婦人会の半日環境整備作業》これらの支援は、子どもとの交流でもあり、地域で子どもを育てる意識の醸成に大きく役立つ。」

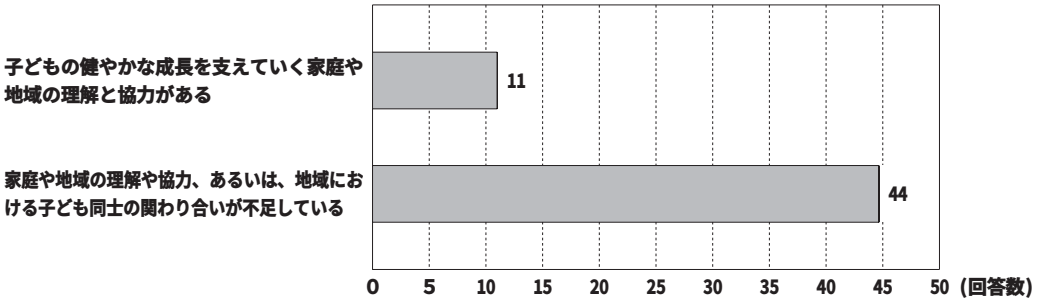
以上のように、家庭や地域の積極的な支援を伝える回答もあったが、圧倒的に数が多かったのは、地域の教育力の低下を訴える意見であった。

（４）「親が背中で教えることが少なくなってきているのかなと感じます。子どもたちを主人公とした地域行事もいろいろ考えられておりますが、それを行う大人が楽しめないことが長続きしない原因ではないかと考えています。」（６）「保護者との連携は欠かせないものがあるが、権利の主張が強く、学校教育への理解と協力が得られないことがあり、その対応に苦慮することがある。」（９）「『地域における教育』が未整備で分かりにくく、学校・家庭・地域社会と並べた時、地域社会が一番つかみにくく、実態も不透明な気がします。」(13)「家庭や地域ともに学校に頼りすぎである。多くのことを学校におしつけて家庭・地域は評論家になっている。」(19)「少子化により、近所で異なる年齢の児童がともに外で遊んだりすることが減少し、人との接し方、付き合う方法を知らない児童が増加している。」(20)「少子化の中で、過保護、過干渉の親が増えていることは間違いない。」(23)「核家族、両親の共働きなどの多忙化もあり、家庭での教育力・しつけがしっかりできていないと感じる。」(31)「保護者の生活習慣がそのまま子どもに反映し、学校に登校しにくい夜型の子や、偏食、身の回りのことができない、掃除が出来ない子が増えている。その放任型と相対して、子どもの全てを支配するペット飼育型の保護者も出ており、その両方が子どもの基本的な生活習慣の崩れや非行に拍車をかけている。」

(42)「子どもの自主性が育つより、親が子どものすべきことをやってしまう。また、毎日、食事をはじめ、欲望を満たされ、『勉強、勉強』と言われている子どもたちは食傷気味であり、自主性も学習意欲も育たない。」(50)「家庭で他の家庭、人のわる口を言っているのを子どもは聞き、育っていること。そのため、子どもも悪口を普通に言っていること。それが友だち関係まで影響している。」

これらのように、家庭や地域での教育が十分に行われているとはいえないために発生する問題の対応に苦慮する学校現場の様子の一端を伺い知ることができる。

設問３－１　家庭や地域における子どもの育ちの現状はどうか



３－２．家庭や地域との連携、協力について

言うまでもなく、子どもの健全な育成のためには、家庭や地域の協力体制が不可欠である。このことについて回答では次のように考えを述べている。

（４）「もっと大人も楽しめ、それを見ている子どもたちが羨望の眼差しで見る地域行事があっても良いのではないでしょうか。」（５）「親自身が異年齢の人々と関わり合いながら、そこから学ぶことで自立した生き方をしてほしい。子どもへの子育ての責任を果たす親の生き方《地域の教育力》を出してほしい。」(11)「メディアづけ《テレビ、パソコン、ゲーム》の子どもたちにもっと本物体験をさせてほしいと思っています。」(13)「連携、協力という前に、『家庭が責任を持つこと』『地域が責任をもつこと』を明確にすべきだと考える。」(15)「人は環境《地域とかあるいは家庭》が育てると考えています。決して学校教育の責をかわそうと考えているわけではありませんが、これが土地柄であります。そのような環境は素晴らしい教育の環境です。教職員が僅か数年勤務して培われるものでは決してありません。その『素晴らしさ』はさらに育て、何か足りぬもの育てたいものを学校と保護者、地域がそれぞれ知恵を出し合って気長く取り組んでいくことだと思います。」(21)「お年寄りのマンパワーを生かし、子どもたちが地域の中で継続的に活動できる状況を創るため、学校と公民館など地域とのネットワークの形成と活用が必要であると考える。」

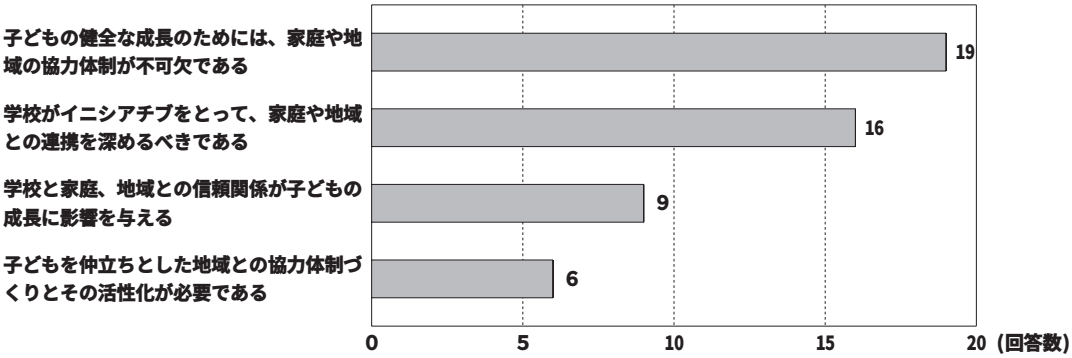
さらに、協力体制の確立のために、積極的に果たすべき学校の役割については次のように述べている。

（７）「家庭には、児童の健全な育成についての学校の取り組みを説明し、協力を得る。早寝早起き、朝食《ご飯、みそ汁》を食べるようにお願いする。」(14)「具体的に学校で取り組む

べき事として、『情報を発信する』『情報を受信する』の二つを考えています。」(18)「保護者との面談を繰り返して、担任との意志の疎通もうまくいって、子どもの言動に良い変容が見られたこともあります。逆に、未だうまくいかない保護者との連携もあります。気長に協力を求め続けていく以外ありません。」(63)「情報発信・受信、外部評価や学校評議員の活用、学校開放日の設定など、お互い《三者》がよく分かり合い、今何に取り組むかを共通理解して実践していくことに努力をしなければならない。」

これらの意見に代表されるように、学校の果たすべき役割として、情報の公開による「開かれた学校」の実現が大切であると言える。

設問３－２　家庭や地域との連携、協力についてどのように考えているか



４－１．山陰地域の教育の特徴（よさ）について

多数を占めた回答は、学校教育に対する家庭や地域の理解と協力であった。

（１）「子どもたちをより良く育てようという共通項《最大公約数》でもって、学校・教職員・保護者・地域住民が一致協力できる点。」（７）「中山間地の学校であるが、学校に期待する声が応援する声に変わってきている。学校に対する信頼が厚く、児童が落ち着いて学習に取り組んでいる。」(14)「家庭や地域社会さらには教育諸機関との信頼や支援関係がまだまだ高いということです。」(17)「地域社会の伝統的なよい面が残っていて、地域が学校を支援しようという気風がある。」(22)「派手さはないが、学校の歴史を大切にし、学校を誇りとしている。学校を支えていこうとする風土は、今まで勤務していた学校では感じる。」(29)「家庭・地域も親身になって学校に協力される。本当にありがたいと思っています。後は、学校の対応次第です。」(30)「全体として教育熱心な人が多い。そして、学校教育に対しても協力的で、地域の自然、文化などを生かした教育もしやすい。」(51)「地域に教育の素材があふれており、そこに住む人たちもとても協力的であること、教員としての力量が発揮できる場であること。」

以上のように、家庭や地域が学校教育を信頼し、理解や協力を惜しまぬ風土が依然として保たれていることが分かる。また、直接子どもたちに対峙し、日々教育活動に邁進する熱心な教師の姿もある。

（１）「自由に発言し、意見交換できる民主的な職員室の雰囲気」（３）「教育に自信をもってあたってきた教職員」（６）「全体的にみれば、島根の教育はまだ質的に高く、教職員も誠実に

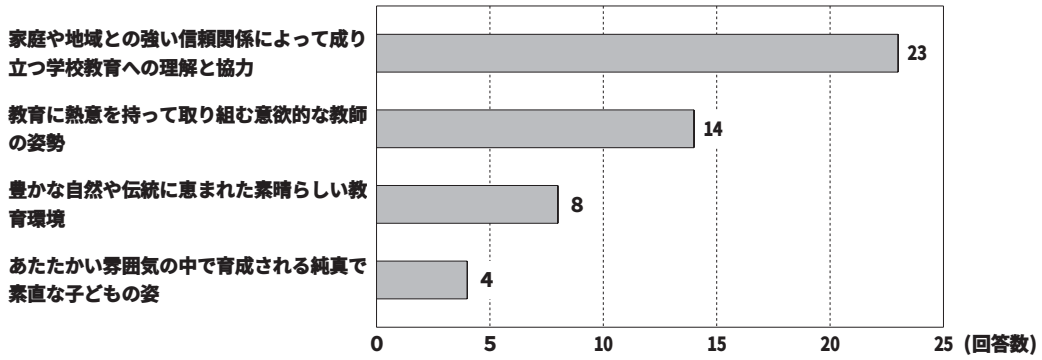
教育に取り組んでいると思う。」(14)「他府県の教育情報や、マスコミなどからの情報から感じていることは、島根教育は全国でもトップレベルにあるということです。」(18)「少人数を生かした、一人一人へのきめ細かな配慮ができやすい環境であり、そのための教育の実践がなされている」(29)「とにかく島根の教員は一生懸命に取り組んでいる。全国の鏡だと自負しています。それを生かすのも殺すのも管理職次第です。」(60)「教師集団の教育にかけるひたむきな熱意がある取り組みにより、子ども達に確かな力をしっかりとつけてきた。」(64)「教職員の献身的な努力、地域との連携などにより、子ども一人ひとりへのきめ細かな指導に取り組んでいる点は特徴としてあげられよう。」

さらに、恵まれた教育環境も特徴としてあげられている。

(18)「隠岐の豊かな自然、人材を生かした体験学習の実践がなされている。」(30)「島根は自然の宝庫。教育環境に恵まれていて、全体として教育熱心な人が多い。そして、学校教育に対しても協力的で、地域の自然、文化などを生かした教育もしやすい。」(43)「自然にかこまれた素晴らしい環境にめぐまれているということです。海、山、川、畑、くだもの、野菜、魚、何でも子ども達にそのままの姿で見せてやれます。のんびりと時間をかけて心と体を教育してやれば、ゆっくり大きく育ってくれることと思います。長い目で大きく子ども達を育てていきたいと思います。」

長い年月によって培われた人間性、人為では手に入らない恵まれた自然環境。これらは、山陰地域固有の財産とも言えよう。

設問４－１　山陰地域の教育の特徴（よさ）は何か



４－２．山陰地域の教育の課題について

この設問に対しては、子どもの意欲と学力の向上についての意見が圧倒的多数を占めた。

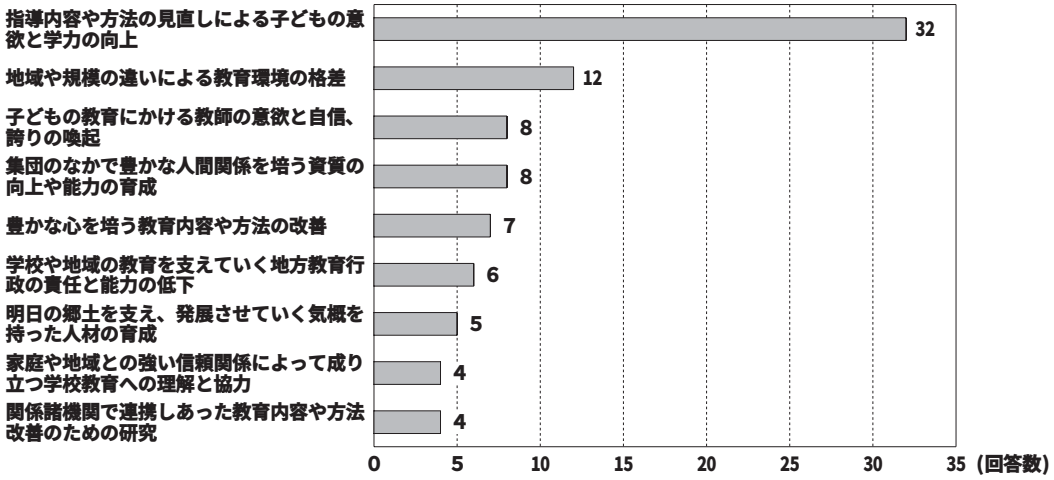
（１）「全体の教育レベルの向上はかなり良いと思うが、個々の子どもの個性を生かし、伸ばすという方向はまだまだだと思う。」（４）「島根県の場合、小学校のどの先生も真面目に取り組んでおられます。逆にそのことが余裕のない指導になり、子どもを追い込んでいく結果になっているのではないでしょうか。」（６）「教育の課題としては、自己実現の基礎となる確かな学力の育成や心の教育が上げられる。」(12)「へき地・複式教育の重要性を再認識することが、島根らしい教育であり特に西部の教育課題である。」(14)「国際理解教育や金銭教育、薬物乱

用防止教育などは全県的には遅れているような気がします。」(18)「たしかな学力が定着しているのか、その把握が充分になされていないことが課題」(20)「学びのための時間をもっと生み出し《文書や書類作成などをできるだけ減らし》、『よい授業とは』『教えるとは』『学ぶとは』といった教育の原点に立ち返り、『よい授業像』を具体的に描き実践することだと強く思う。今の学校は、授業やその準備にかける時間が短く、これでは学校は変わらない。」(24)「児童生徒の学力が都市部と比べて低いように思う。勤務する私たち教職員は全国的な規模での学力テストなどを主体的に活用し、実態をあきらかにすることと指導方法の向上について研鑽を積極的に行うこと。」(25)「高校入学時の生徒の成績を全国と比較したり、国体の順位を見たりすると、学業面、運動面ともに最下位レベルにあるということで、学力、運動両面に渡ってレベルアップが必要と思う。」(27)「今こそ、授業づくりと学級づくりの両面から、子ども達を集団のなかで鍛え、そして、個に返していくという、学習集団づくりのような地道な取り組みが必要とされているように思う。」(41)「中学校では教育課程を十分にこなすことが難しい《時間的な》現実があります。」(42)「全国の標準的な教育課程ではなく、山や川・海、雪などの地域の自然を生かした学習を教育課程の中にもっと入れ込み、地域学習の推進を図りたい。」(46)「都会に比べて伸び伸びと学んでいる。しかし、学力については、幼小の頃から塾などでの学習機会の多い都会に比べれば差が大きくなるのではないか。その分、学校が基本的な部分、発展的な部分を含めてしっかり身につけさせなければならない。」(52)「地域の素材や地域の人材を多く導入しても、基礎基本の定着に直接結びつかないこと。」

以上のように、校種や場所によって問題のとらえ方に多少の温度差は感じられるが、総じてこの問題への関心の高さが伺える。また、学校規模や東西に長いという特徴から生じる教育環境の格差について指摘する意見もあった。

（９）「県の東部と西部の気質は異なっていて、東部は覇気が乏しい気がします。」(10)「県西部地域は、産業基盤が極めて弱く、進路先も県外の大手企業に依存するという状況強く、残念でなりません。今、全国の地方において、行政と地域産業と専門高校の三者が連携して、産業復興と人材育成が叫ばれています。地域の自立と専門高校に学ぶ生徒の夢が育まれるよう、当地域においてもこのような機運が高まることを期待するものです。」(12)「島根県の全小学校の３割が複式学級配置校であり、僻地校は４割にもなる。少子化の上、小規模化の中で子どもたちはますます人間関係調整能力が学習されないまま大人になっていく。大人の引きこもり、人間ぎらいなど社会問題に発展していく可能性もある。へき地・複式教育の重要性を再認識することが、島根らしい教育であり特に西部の教育課題である。」(44)「私は、教職のほとんどを日野郡で過ごしておりますが、過疎が急に進み、児童数激減の様子を目の当たりにしています。少人数の中での学校教育のよさもたくさんありますが、できれば適正な人数の学級集団の中で、もまれながら逞しく育てられるといいなと考えておりますが、これはかなわぬことです。」(54)「東部と西部の教育施設や制度の格差が大きいように思います。市町村において財政の違いがあるかもしれませんが、いろいろな面で西部は少し不利に感じます。」(58)「どんどん複式校が多くなっていく中《各校一人の割り当て出張や提出書類に追われるよりも》複式を生かす授業や学級経営に力を注ぐことのできる体制づくりが必要。」

設問４－２　山陰地域の教育の課題は何か



５．島根大学教育学部に期待・依頼することについて

今日、学校現場が直面する様々な教育問題は、その学校だけでは解決できない複雑な要因も絡むようになってきた。このような状況の中で、悩み、迷い、苦しむ学校の姿がある。家庭や地域と手をたずさえてこれらの問題に立ち向かっていこうとする学校現場にとって、島根大学教育学部が、単に教員の養成機関としてだけではなく、引き続き教育活動全般への協力支援機関としての役割を担うことを期待されていることが分かる。

（４）「島根県の教育の現状・問題点について、なかなか教員同士では言えない面があります。そこのところを明らかにし、提言していただければと思うのですが。」（６）「学校現場に直結した教育研究を期待したい。また、地元に目をむけていただきながら、できるだけ島根県下の教職員のリーダーシップをとって頂きたい。」(14)「松江あたりでは附属小中学校だけでなく公立の学校と共同研究をなさっています。是非こういうことを続けていってもらいたいと思います。旅費などの問題もあると思いますが、県西部や隠岐地区あたりでも実施してもらえたら嬉しく思います。」(17)「教育の目指す方向、家庭や地域社会が子どもに対して果たすべく役割等について、一般社会に幅広く訴えかけるイベントを開催するなど啓発活動を継続的に行う。」(21)「学生、教官とも現場や実社会の中で様々な人々と対話することをお願いしたい。」(22)「地域に開かれた島大教育学部として積極的に人材や教育資源を小学校など学校現場で生かせると良いと思います。」(24)「大学の先生には、現場の先生と自由に語り、現場が抱えている問題を受け止め示唆を与えるような研修会の開催や現場研修会の講師などをお願いしたい《現場の教職員に大きな元気を与えてくれると思う》。」(29)「子どもの育ちについて、現状について方向性について具体的におもしろく、わかりやすく講義して欲しい。おもしろくないと聞けない大人達が親です。」(31)「PTA研修会、学校の研究会、公開授業など是非積極的にお出かけ頂きたい。」(34)「研究者の先生に時々学校訪問していただき、刺激を与えて下さればありがたいです。どこかへ行かれたおりにでも、お立ち寄りいただく程でもよろしいかと思います。」(38)「教科ごとの、大学・高校・中学校・小学校・幼保育園の連携を《これからは校種を越え

た教育連携が必要となりますが、その呼びかけを島根大学教育学部にお願いしたいと考えます》。」(57)「複式なら複式のことを専門に研究し、現場に生かす場を多くもってほしい。」(62)「教育学部教授陣の公開講座ではない組織的な出前講座を期待する。」

さらに、日々現場で奮闘する現職教員の意識改革及び指導力向上のための機会の提供を求める意見もあった。

（５）「以前の教育実践の自己の枠組みから脱皮できないことを原因として学級が成立しない教員の実践的再教育。」（８）「山陰地域の課題を踏まえ、現職の教員に対して教育のあり方、方向性についてご指導いただきたく存じます。」(20)「県教委と学部が一層連携を深め、現職教員の研修の場として機能する学部であってほしい。全国に誇れる島根の教育を確立していただきたい。」(40)「管理職の研修に是非力を貸して欲しい。」(52)「学生の時にはわからなくて現場に出てから気づくことが多いので、社会人枠として特に夏期休業中の講座を企画していただきたいです。」

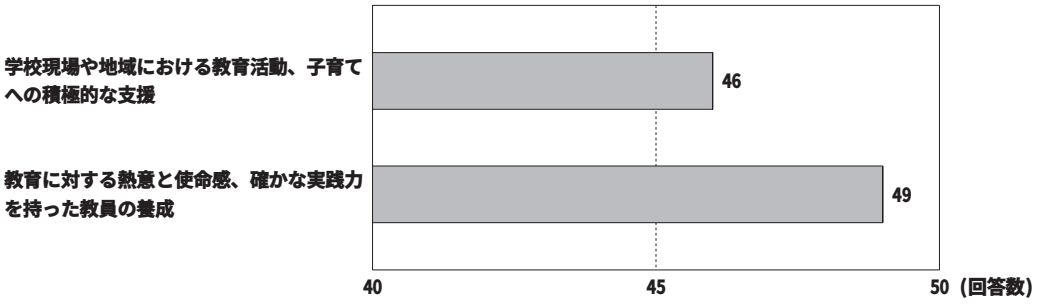
もちろん、教員養成機関として教師の人材育成に対する要望も数多くあった。

（１）「教育愛に燃えた教師の卵の養成。ヒナではなく卵でいい。技量は現場に出てから十分培うことが出来る。要は姿勢。」（２）「教育に対し、熱意あふれ、行動力のある教師を卒業させてほしい。」（５）「あたりまえの社会人としての常識や判断力があり、学級集団を組織する力量のある教員養成。」(14)「島根教育の核になる島根大学出身の教員が増えて欲しいと思います。」(17)「社会の変化に対応できる柔軟な発想と多くの人と連携していける積極性を持った教員を育てる。」(23)「子どもに愛を持ち、人間性豊かで、指導力があり、保護者からも信頼される人材の育成を期待したい。」(27)「教師としての使命感をきちんと持った優秀な教員が養成されることが望まれる。ただ、いくら知的に優秀な教員であっても、決して単なる小手先の技術指導だけを持ってしても、教育現場では通用しない。これからの教師は、指導技術もさることながら人間性の豊かさがどの程度備わっているのかが問題になる。」(32)「講師であろうが教諭であろうが、学校現場に入ると一人前の教育活動が期待される。そのためにも、他人から言われて動くのではなく、自分から進んで動く意気込みで活躍する学生を養成して欲しい。」(36)「心身ともにタフで好奇心旺盛な教師の育成。力仕事や作業ができる教師の育成。コミュニケーションができる教師の育成。」(42)「人として何が大切なのかというしっかりとした教育観をもつ教師の育成を望む。失敗を恐れず挫折に強い心豊かな人づくりを望む。」(47)「自分で考えて行動できず、言われたことだけを形式的にやる若手教員が増えている。講義を受けることだけでなく、自分の考えをぶつけ合い互いに学び合い高めあい、意欲的に実践できる教師を育てて欲しい。」(51)「子どもと職員と地域の人とコミュニケーションのとれる人材の輩出。マイペース型が多い。」(63)「教員養成機能の多くが島根大学教育学部にまかされたので、豊かな人間性を持った教員志望者を育成してほしい《多様な体験活動の中で、豊かさやたくましさを持った人格を育成すること》。」

これらの意見からは、教師ということに止まらず、社会人としての資質に長けた人材の輩出を待ち望む現場の強い思いが感じ取れる。さらに、教師としての職務に直結する本学の教育課程のあり方についての意見もあった。総じて、実際の現場体験を通じて教育への意欲と実践力を培うことを期待する意見が多かった。

（３）「子どもの遊びのリーダー又はコーディネーター的役割を期待している《ボランティアとして》。遊びの指導者が欲しい。」（７）「現場に半年《あるいは３ヶ月》間授業、学級経営などで研修させたい。」(10)「島根大学教育学部には、普通高校出身の学生さんが多いと思いますが、技術や技能を柱とする職業に関する専門教育の重要性や専門高校への理解を深めて頂けると大変ありがたいと思っています。」(11)「本校ではチューター制度によって総合的な学習や放課後の指導を島根大学の学生さんに入ってもらい効果をあげています。このように教育実習期間だけでなく、日常的にも学生さんが学校現場に入っていただくことは、子ども達にとっても学生さんにとってもプラスになると思います。今後もっと時間を延長し、インターン制度のようになればいいと思っています。」(31)「教員養成において、学級づくり、話し合い活動、生徒指導など、より現場に密着した学習課題を設定して頂きたい。」(34)「教育実習の一環として学生を一日でも二日でも派遣されてはどうでしょうか。本校はいつでも受け入れます。」(62)「小学生と学生の交流の機会を増やすことができればありがたい。今年は地域調査で社会科専攻の学生さんが訪問してくれたが、子ども達にとってはとてもいい交流機会となった。」

設問５　島根大学教育学部に期待・依頼することは何か



III．おわりに

先頃明らかになった学力の国際比較の結果、日本の子どもたちの読解力や、算数・理科の平均点が下がったことが分かった。さらに、数学や理科が嫌いだという子どもの割合も増えている。そして、点数の高い子どもと低い子どもの「格差」が広がる傾向も出ている。全体的に見ても、勉強に興味があるとか、学ぶことが楽しいという子どもが、日本は他の国と比べて少ない。さらに、ゲームやビデオ、メールに費やす時間が増えた反面、読書や勉強の時間が減少している。このような状況を招いた一因として、新しい学習指導要領で大事な内容が削られたり、基礎をじっくり身につけたりする時間が少なくなったことを指摘する声がある。文科省は「学力向上」策をとるといっているが、新たな「詰め込み」を懸念する声も出ている。しかし、この調査の目的は、国の順位をつけることを目指すのでもなく、知識をどれだけ獲得したかの測定でもない。社会生活で直面する様々な課題に学んだことを活用する力の測定が目的である。この結果を冷静に受け止め、着実に改革する道を探る必要がある。

その点、今回山陰地域の小中高等学校の管理職の皆さんにお願いした調査の結果からは、しっ

かりとした教育観に基づいた、まさに地に根付いた立派な教育実践が行われていることを伺い知ることができた。それ故に、全国で唯一教員養成に特化した島根大学教育学部に現場から寄せられる数々の意見には、真摯な態度で耳を傾けねばならない。教師を目指す学生や院生の教育支援の充実・強化と山陰地域の学校などの教育機関・関係者への支援体制の確立により、21世紀の新たな教育県・地域づくりの先頭に立つ教育学部を目指すことが大いに期待される。

校務多忙の中、丁寧な回答文をお寄せ頂いた校長先生方に、心より感謝申し上げます。

参考文献

１）苅谷剛彦・志水宏吉（2004)「学力の社会学－調査が示す学力の変化と学習の課題」岩波書店
２）日本教育方法学会編（2004)「現代教育方法辞典」図書文化社